

繪本豐臣勲功記

初編
七

4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8



繪本豊臣勲功記初編卷之七

目録

木下悦美濃攻見破上修心

附 奪主水書

上修争餘帰伏木下智勇

附 秀吉勸軍

豊臣初編卷之七

目録

戸部新十郎親山口勅靜

附木下偽我



繪本豊臣勲功記初編卷之七

櫻澤堂山編輯



木下説義濃攻見破上嶋心属奪主水書

意馬心猿と画がけのあや。信長秀吉と潜圖とるあや。猿よく馬小騎繪あり或ハ猿が馬と牽けり。實小馬猿ハ中よりの飲。然れバ星宿も徒々。信長ハ午のうまれふしく秀吉ハ猿のうまれぬを。君臣の中睦トは絆。漆膠もこれありあろ。然れど小織田信長ハ。今川上洛の風聞よつひも。軍の評定せらるる。諸老臣の諫言ハ。懦弱の詞の言葉を小より一圖信長の意小樞を。此上の衆評小造を。藤吉郎の来るを待。渠が異見と听んを。の。とせあふ小程もあつせよ。

木下秀吉出仕して。静小自己が席小座を。信長遅詫あつて。わく。いふ秀吉。今川上洛の事小つた。迎へ合戦するがよきや。隙と和睦を遂げさうや。所存と語ると命を時。諸老臣の心中。小。定めく木下主君小討し。血氣の勇を進めりふさん。勝き猿面。顔色よと睨決てて扱つる。响小木下後を射る。ひとりあつる。咳ぬ。詞温和小言伏せ。命の兩條左右とも宜しく。いづれを何と評めさう。然ども切覺命せと奉ん。黙止べ小非ざれば。這兩條を合揚ひく。大孝をゆる謀畧あり。と听ん君臣雙共。小。願ひ又何ある術と。不審とられ小藤吉郎。今諸老臣が諫議せらる。和談りつとも宜しと。へ柴田佐久間林の門。木下今日何と。斯様る詞いふやと。悦ぶ色と

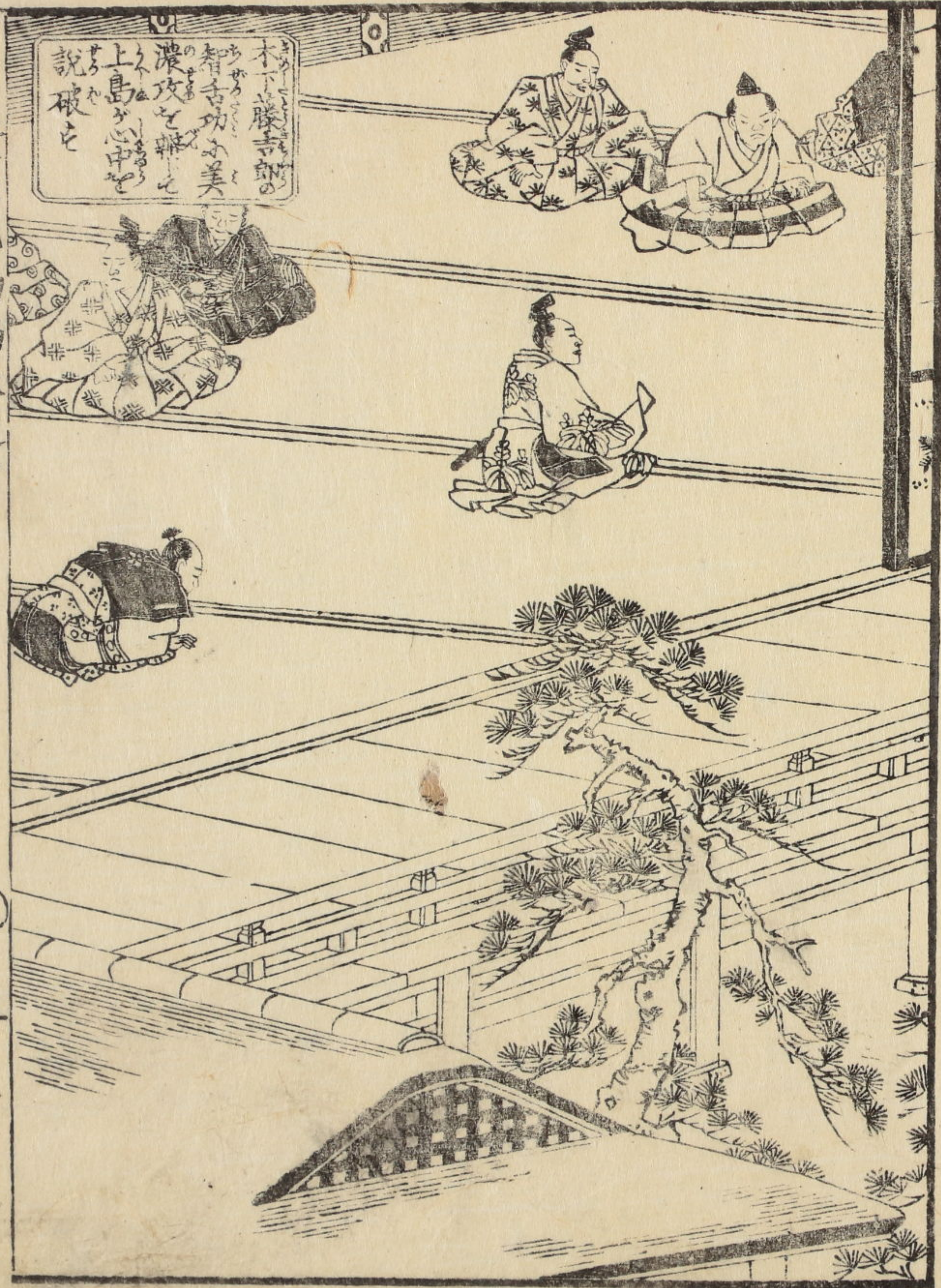
信長獨氣色を損とて声振と。藤吉郎何とりふとせと。この信長を今川の幕下小属とるりつての外あり。噫諱とて怒らせぬ。藤吉郎推返して。否然ふあつて合戦のいふも勇々。あそとせと。言とて柴田儕眼を腫ら。木下何を私言とせと。合戦もせよ和睦もせよ。餘も君と嘲哂する。否礼言の掌と。さ。今川義元上洛の沙汰ハ今小叔めぬるえぬれば。勿く急小。こ。あるべし。其とて一遭和睦を。義元剛影は。隙小稲葉山を攻め。今齋藤の一族ハ君の為。小舅の仇。そのせ道。義龍を誅し。あつて義兵あり。義龍とて滅さ。羨濃ハかのづ。御領とるべし。如く自軍の小勢るる。今川義元欲する。羨濃と軍もるる。是。今川が上洛の沙汰あると。羨

今川和談を承地せし响加勢の事を謂
 やるべし。今義元加勢へせむと云。尾刈乱入の愁なるらん。只其
 隙に義濃と平均濃尾兩國の勢を協せむ。義元と軍しむる
 何條難き事と云。是万全の計畧と云ふ。信長听しめし。
 藤吉郎が詞然るべけれど。原齋藤の大家ふし。河の要津
 あり。是を撃つこと容易なるま。否くこれ中術あり。二兵三小
 川を渡さる一戦のうわ火と放ち。稻葉山を焼起ん小。義濃武者
 何万あればと云。如何に怖懼をせんや。原来齋藤義龍の父を
 殺せし悪逆人誰かこれと悟まざるべし。頼とのりく逆せらるる
 必勝の時機相懸るべし。況や義濃の武士に心力法く胸氣拙し
 自軍の勇士一人せり。敵の十人廿人ゆも當るべし。これらるる小も。

頭小達輩のあると听せ。贖大将義龍の暗昧愚痴の生管小
 しく。武士を養ふ道と知らむ。在道の下小勇士にあら。今ら
 せん。何時と待ん。伐が勝つる响熟し。快御心を決しぬと。
 言快し。目と目を觀合せ。頼小勸めまぬせし。信長深く
 勇濃攻を心小よしと云思さねど。思材ありげ小木下。目注せし。
 怪しと云ひ。然るま。遠義小熟く思案と云。宜ひらると云。
 座の末梢よを声小ひん。木下氏が計の所。りての外小は。との小を
 信長恥と云えられ。是の上島主水あり。所謂いふ小と云。官人へ。
 主水謹言を云。今木下がりかさる。義濃國小の勇士もなく。
 義龍愚昧の悪逆人と只一口小いなる。傍若無人と謂ふべし。
 彼國往古。源頼光の任國小しく。子孫代々國小残を先祖の

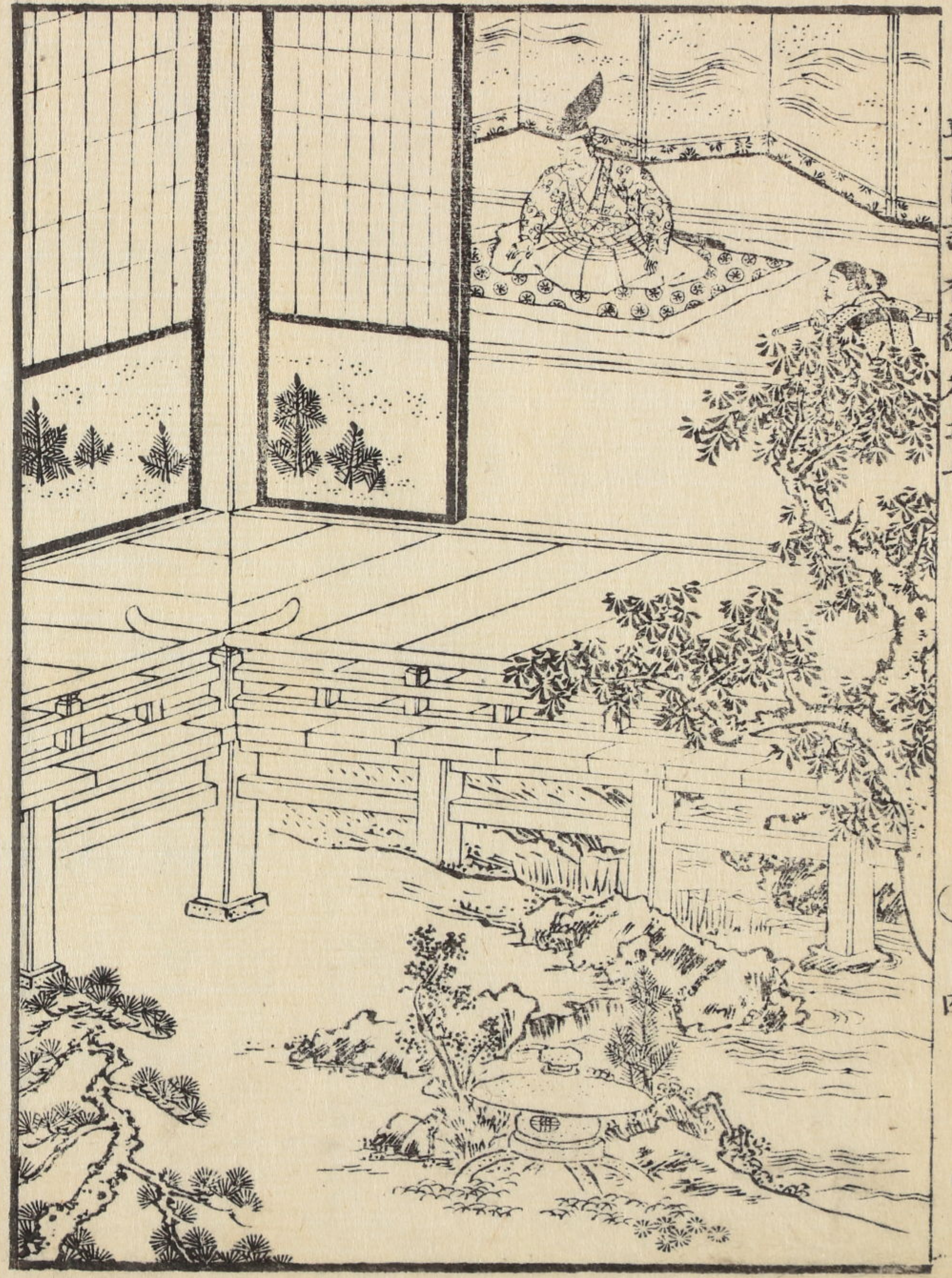
武勇を今が世に傳へし。律へ食人の遍く耳目に知らせし。
 小臣貞濃と鈴淵時境。齋藤家の名士と粗听。日根野
 備中守同弥治右工門。齋藤九郎左工門。長井隼人。小牧
 源太など。いづれも食是万夫不當の英雄なり。今木下が
 言やうなり。義龍何ぞ濃列を欣懐ひべし。律を得んや。
 愚昧の義龍ありとくども。故道三のさたよりの威勢さくん。
 听えし。況や近江越前。浅井朝倉と縁家と。
 楽濟が加勢とるまじ。渡海の犬象翼を生。登天
 の神蛇。雲をほする小異なり。いづれ容易に伐るべし。
 今川小加勢とるむも。最危き御事。如くは諸
 老臣の御諫めり。一まわを。如く暫く今川の幕下小

属。時節をけり濃列と取あはら。逢う。今濃列小向
 とせよ。備軍功もる。响。前小齋藤の誓とむ。後小
 今川の怒と承。前狼後虎小困逼られ。終の御家の滅亡
 せん。よしく。尚遠慮あるべき。律と理と。今と諫めし。
 柴田佐久間も遠義小同。あつべし。と言と木下。首とら。振
 諾と。冷笑と。上島殿の。濃武士と。稱義し。
 置々し。小臣も。齋藤家の。剛臆賢愚と能知。一日
 斤時滞留せし。旅客の暇の推量と。大相違のおもひ。
 咱の所と諦小聽。よ。开も。日根野兄弟。長井小牧。輩小。剛
 気の听え。あり。つれも。食是匹夫の勇。一。身。脆。士。
 智と。り。渠と。倒。え。律。へ。苗。と。抽。より。猶。易。を。世。小。西。義。濃。の



豊臣記
 初編
 卷之七

五



豊臣記
 初編
 卷之七

四

三人衆など異くしげふ言せども。各く自己が力を構守ん。主家の
ごめふ力を竭し。命を棄ん忠義のあり。一。原来美濃の土岐
殿の領し来り。一。國ふし。三人衆も土岐の臣なり。然るも土岐殿
齊藤ふ追つてとる。三人衆が素知らぬ顔し。お過し。将
道三入道殿。子の義龍ふ攻られ。さども。遠をも移ふら。る。一
然るれば逆を助る毒族。智勇の士ども。天理ふ背く。功を遠げ
地のあるま。一。齊藤義龍威をあら。一。美濃一國ふま。つ。り。とも。
父を弑し。世の人ふ。何と。向へ。顔あ。らんや。これ三千のつと
つ。る。も。不孝よ。を。大。つ。る。い。る。し。と。り。り。父の即ち天ふれば父を
弑せ。一。輩の。天ふ逆。ある。逆賊なり。天ふさ。つ。へ。人背く。その
旗下ふ従。あ。く。如何。あ。ど。これ。を。助。る。さ。も。天の。捐。る。族。ふ。し。く。

功を遠る。所謂。一。一。く。く。美濃の人。つ。る。さ。も。織田殿。小。隊。系
一。其。分。の。智。勇。を。顯。さ。び。さ。り。も。つ。る。を。さ。も。て。天。小。頼。し。く。天。小
逆。ふ。を。伐。た。れ。ば。自。己。こ。ろ。智。勇。ふ。あ。ら。さ。ら。ひ。功。名。忽。然。と。顯
せん。鶴沼の大澤。菩提の竹中。西美濃の三人衆など。原来
齊藤の家人。小あ。ら。さ。ら。せ。世。小。連。を。時。小。陷。ふ。て。當。時。旗。下。小
属。さ。ら。る。の。と。然。ら。ば。逆。道。の。美。濃。ふ。あ。ら。さ。ら。ひ。借。小。天。小。逆。せ。ん
よ。り。一。有。道。小。属。を。渠。を。伐。る。が。最。も。正。路。と。謂。つ。べ。一。朝。倉
浅井の人。こ。が。義。龍。と。中。親。と。と。も。逆。天。の。人。小。加。勢。は。あ。る。ま。じ。
縁。家。を。め。り。ん。これ。を。謂。バ。咱。君。と。も。何。ト。律。渠。疎。ら。れ。ば。さ。ら。一
ふ。も。疎。し。一。奥。小。心。な。り。し。ん。と。水。ま。さ。し。心。の。な。ふ。あ。ら。ふ。ぞ。加。之。白。男。の
仇。を。伐。ん。と。思。起。り。信。長。信。義。全。た。ふ。さ。り。信。義。を。以。ん。渠。を

伐小。天道てんどうのみとに加か斐はい力りき。彼かをは斐はいとすることは彼かのなり。なううんん。天てんのたすけ
 ところをなれば。天助てんすけのきん君きみのせむ背せむくべうくせ。故ゆゑ小こをは御軍ごぐんとす。心こころ勝かち
 といひまうつつれ。とり非ひ分ぶん明めい小せう説せつ釋しやくしるべし。主水ぬすみづもい今いまのご言ごん句くなく。
 岡おか口くちとし赤面せきめんをは柴田しばた佐久間さくま由ゆ這理ぢり小せう責せきられし。詞ことばをは放はなりわ別べつ
 なられば。徒あま不ふ興きやうゑふひくうう。信長のぶながつく。听きしゆ。ゆされば藤吉郎とうきちろう
 がめいままま條じょうのも頭かぶをりもも虚隙きやくならばは既すで這上ぢりあの論議小せう造ぞう
 ちとと予が心中ちゆうの決しう。といひま後殿かくだい小せう入いぬべ。諸老臣しよらうしんふも。
 名なく小自じ郎らうをは退去たいそせし。然しかる小秀吉ひでよし唯ただ獨ひとり退散たいさんならばは何なに
 りと。信長のぶなが情なさけ小せう昭あき倚よられし。今いま美濃みの攻せをは勸すすむら。目注めしゆせしいへ
 何意なにごとぞと。官くわんせぬふと木下きのした拜膜はいまく。これは小臣せうしんが計畧ふく。齊藤さいとう
 攻せをはあぬ。といひま一いつも御座ござ下した小せう虚實きやくじつをは窺うかがふ及間まの逆徒

のあると欺あざむくまりと。とき信長のぶなが大おほ小せう警おどりた。今いま丁ちやう家けふ及間まの
 らせめのありといひをはねい。うらる輩とは當あたり。謂とはづの小せう木下きのした
 声こゑとは低ひふし。上島うへじま主水ぬすみづゆくいらる。其叛はんよりは渠みち奴やつめは美濃みのの間
 者ものとは推量すいりやうせし。小臣せうしん腹心はらこゝろの者とりては主水ぬすみづが家小せう奉公ほうこうさし。虚
 實じつじやういふふと窺うかがむら。小せう齊藤さいとうの間者小せう相違さうゐなら。澄すみ扱あつくゆと
 一箇いつくわんの密書をは米出こめだし呈げしゆら。遠書とんしよの主水過あり。我復われ心こゝろの
 小せう助すけといふ者。これは濃列のうりやく生なまといひま。健兒けんゑ奉ほう公こうさせつる小せう上嶋うへじま
 主水ぬすみづ心こゝろ浅あくも。小せう助すけといふ者の美濃生なまと思ひつあら。密書みつしよをは尙
 せ。渠みちが兄といふ者。鷄沼けいぬま城じやうの大澤次すけ郎らう左ひだり工くわだ門かどが許く使えし。其あの响
 兄あにが返答こたへをは即すなはち奪ふにゆきつる書あきり。其上うへ小せうもも不ふ御前ごぜん小
 置おきく。澄といふ者をは招道まうだうさせんと。今いま日ひ評議へうぎの席をは奪うひ美濃

攻の事ことせりしる。案あん小違さかを上島じやうじまが怒声いかげんと濃州武首のうしゆぶしと
 稱美しょうびなり。つる七なながうう小。塚家指化つちかさしを言出ことごとたり。これ目前まへ
 たる間考まかんの證拠しやうこ。ゆるり御由ごよし申まをす。と一言ひとことし。ゆぐ
 まま上じやう迄いた。肝かん小こ銘めいとと感悦かんえつあり。苟且くわんじなりぬ木下きのした。遠慮えんりょ
 深計しんけい大張だいしやうく。實じつ小憑こたよりり。忠臣ちゆうしんなる。然しからら今川いまがわといいる
 るさんさん。汗あせかか。和睦わもくの沙汰さたの思おもひももよろよろ。義元よしかげ上洛じやうらく
 あるある。境面さかいづら小こおお発はつ。御合戦ごがっせんこと然しかるる。御勝利ごしょうり
 するする。信長のぶながまま。藤吉とうきち郎らうを
 返かへされされ。然しかるる。小上島こじやうじま主水しゆすいのの木下きのした。洞ほらとと選えらべべられられ。御ご
 痛いたくく。説破せつぱられられ。愈い々い秀吉ひでよしとと怨うらむむ。始はじめ亡なりりのの小こせせんとと計けいららひひ。
 柴田しばた佐久間さくま小こ。渠みちとと武兵ぶへいのの偽道ぎだう小こ。人ひとをを惑まどすす。

ももとと族うぢられられ。果はししののちち。國家こくが小仇こあひせん。御老臣ごらうしんのの賢けんくく
 小もこも。疾はやくく其その様さまとと案あんしし。渠みちとと退ひけけ。玉たまとと君きみ小勸こまをめめ
 せせらられれ。終つひ少すく。大だい事じなるる。ととのの小こ柴田しばたもも実じつ小もこも
 ととかかひひ。何なにささ。渠みち奴やつのの今いまとと對強たいきやう。已い後ご自品じひん経昇けいしやうららべべ。
 定さだめめくく。猪士しゆしとと眼め下した小見けん早はや。いいくく事こととと做なさんさんももああれれどど。
 悪木あくき芽枝めえとと前まへぎぎられられ。斧きりぎり鉞せきとと用もちるる。然しかもも主君しゆきみ
 藤吉郎とうきちらうがが信辨しんべん利口りくち小惑まどされられ。容易やすこれこれとと退ひぢぢ。よよららぬぬ
 方便べんべんなるる。有ありり。のの小こ上島じやうじま。膝ひざををめめ。茲こゝ小こ寃をん竟けいのの伴ばんことこと
 あれれ。過朝かあさ渠みちとと小臣こしんとと鎗やりのの較量かくりやうををせせ。後ご。ああたりり小こ已いとと
 罵ののりり。胸むね安やすくく。心こゝろありり。小こ子こ渠みちととちちひひるる。只ただ一ひと
 柳やなぎ小突殺つきころ。後ごのの愁しゆとと断たんととかかりり。時ときふふ。公こう倚よののちちりり。

りて。怜小臣と木下と鎗の較量の御許容あるや。ひことの
頼ひふと申る。と言ふ推六右門尉。其のよは事よと云起
らふ織田殿の御前へ出而士細と齋ふる。這比評議の
席おかひて。藤吉郎が言せしむ。御意お稱ふやうなまども
如何あも危くいと云。諸士の心中一致せど。諸士の心區なればい
る。妙計奇畧おされ。施得と能ふま。られ藤吉郎が新系
ふと。利口遠辨の然ことる。其お武勇ある解とひとの
あさる。故る。先日の獲の因もあれば。上島主水と藤吉
郎と御前おかひて雌雄と決し。藤吉郎がお贏る。才智と
いひ武藝といひ。他信といふ。さへ木下輸る。りとも。
主水の師範なれば。藤吉郎の耻も。さる。早速兩人が

較量の義。命属られおんふ。と詞を尽くと勸る。お信長心よ
儲と云。藤吉郎と妬む族。家宰脩へ較量の解と。さる。めく
謀と。りの。主水の名と。巧者なり。藤吉郎ハ那量の
修練ある。あや。と家宰脩への返答。あや。せ。あ
機會と。あれ。藤吉郎出来。信長休ことと。お
主水と較量と。さる。や。い。お。同。お。秀吉異義。お。道。お
諾受せり。

上島争鎗歸伏木下智勇 属 秀吉勸軍

雨。さる。んと。歌。さる。則。へ。土。沙。濕。ひ。風。さる。んと。歌。さる。と。た。へ。瓦。石
乾く。天地猶斯のごと。況や人おかひてを。思ひ。う。あ。あ。あ
さ。た。の。色。と。と。小。露。路。と。木。下。言。下。お。美。濃。を。誹。く。さ。ら。ま。の。主。水。が

素姓もとぢうと云ふ。おのれと招道ちやうぢさせりし。魏ぎと申まをし趙ちやうとせりし。の謀そくご
より出いでるるらん。然しかども主水ぬすみづはこれと悟さとらる。休やす累るくも今いま
又またあつて。較量かくりやうと望のぞむ心根こころねへ。底計そこけいと云ふ。愚おろうと云ふ。然しかれども
上総助かみさねすけ木下上島きのしたかみじま両士りやうしとゆされ。御前ごぜんおひて較量かくりやうの事ことを命めい
らる。小こ雛ひな及あ輩はいとも。謹つしむ御ご諾だくりし。あつて木下御前きのしたごぜんお朝あひ。
上島かみじまおも小臣こみおも共ともお御内ごうちの武朋ぶぼうなれば。甲かひつりともし。ひ
つりども。遺恨いこんあるべしやうへなれば。懃まとのこめおひて。勝負しやうぶも
属まて差別さべつと立たて存ぞんずるなり。小臣こみ主水ぬすみづ小突勝こつきやう上島かみじまとりて
小臣こみが家の奴ぬおなをえきやう。命めい令しやうられり。主水ぬすみづ小臣こみお
突勝こつきやうハ小臣こみ主水ぬすみづの奴ぬと云ふ。遠義えんぎ御ご許もとあるべしやと。信長のぶなが所しよ
めし。主水ぬすみづといくと同どうあふ。小臣こみも斯か存ぞんし。つり。おひし。つり。

上島かみじま主水ぬすみづ。その侍さむらひ起たち多おほく。較量かくりやうの席せきへ立た嚮むかふ。上総助かみさねすけ
よを。西人さいじんへ。長八尺ちやうはちせきの竹槍たけやりと。左右さゆうへ。二條にじやうあつて。つとえり
勝負しやうぶを決きせよと。命めいせよ。木下きのした威儀いぎを整ととへ。槍やり推おち。主水ぬすみづは
迎むかふ。上島かみじまハ預よりよを。好このむ八尺はちせきの槍やりなれば。咱おの練ねき。一い術じゆつ
りつ。只ただ一い棚たなと跳と躑とむ。と。藤吉郎とうきちらう。生質なまぢなる。割わり姚やう
自在じざい天授てんじゆの修しゆ練ねふ。上島かみじまハ心中こころぢつち。あち。驚おどろ。怖おそれ。渠か奴には。お
とて。斯かま。碌ろく磨まの。おど。の。お。と。り。た。遠とく。咱おの分ぶんの。浮う漉しゆり。と。
秘術ひじゆつを。尽つく。と。聞きひ。小藤吉郎ことうきちらうが。摘つ放はな槍やり。ええ。と。見みえ。づ。と。
其その疾事しやくじ。龍りゆうお吹ふく。騷さわ雨うの。如ごとく。虎こお吼こらる。馳ち風ふう。よ。侶りと。と。
憤あ叫けい。と。ひ。く。棚たな起たち。ふ。主水ぬすみづの。槍やり。尖さ。糸いと。なる。木下きのした。お。つ。り。と。あ。と。
責とく。睨に。と。眼まなこ。ら。め。が。主水ぬすみづが。眼まなこ。さ。る。と。眼まなこ。光ひかり。お。射あ。ら。る。と。如ごとく。



木下の鎧術
 神不通し
 遠上島を
 恐敗せし
 びつ圖

全身まぐんで横きほぞ。云朽憾と思ふるふ。ちやくも木下
 上島が槍をのりまとお墜し。只一柳の死あせり。信長あも
 ち座を起し扇を弄きあひ起。秀吉勝り。天功と
 と讚多へ柴田佐久間へ案お想違し。鞆果を憫然する。
 主水へ地ふも没した面目。実木下へ凡夫とと首を垂く
 龜伏し。信長顔色黒く。上島に向をせおひ。約せしごとく
 今日よ。藤吉郎が奴と有り。嫉妬偏執の心を断。忠義をつく
 しと仕ふべし。と命せお主水力なく。謹ぐ奉諾を。依木下お
 らし。おへ。藤吉郎られを請率。然しと土水おらむおひ約束
 といひ。誑意の上へ異儀なく。咱おあさおひおへ。言後さる思材の
 あれば。咱宅へ来られよ。といふお主水の阿容。と後お従く

退出し。後お残り。冢宰の西人。柴田佐久間へいと不興
 におへ。信長をく。召し上島主水の中國の實人あり
 といひ。誑口実へ齋藤家の同者なり。藤吉郎の智をい
 渠が実否を正さん。遠比評議の席おひく。美濃攻の詞を
 言せし。全く主水が心中を探。計畧あり。然るお今日
 藤吉郎主水お打勝奴とく。伴返る。絆なれば。さめく渠が
 素姓を正し。お謀ひのふとるんが。某輩侘も木下が今日
 の武藝をえし。新参なり。と侮つべし。忠義をつく。秀吉
 るれば。已後各々。懇志を通。憎ま。軍議を終。是信長
 が。め。と命せお両士拜膜。且驚く。退出し。然る
 る。お秀吉へ主水お伴ひ。咱家へ歸る。渠を困。お招き容

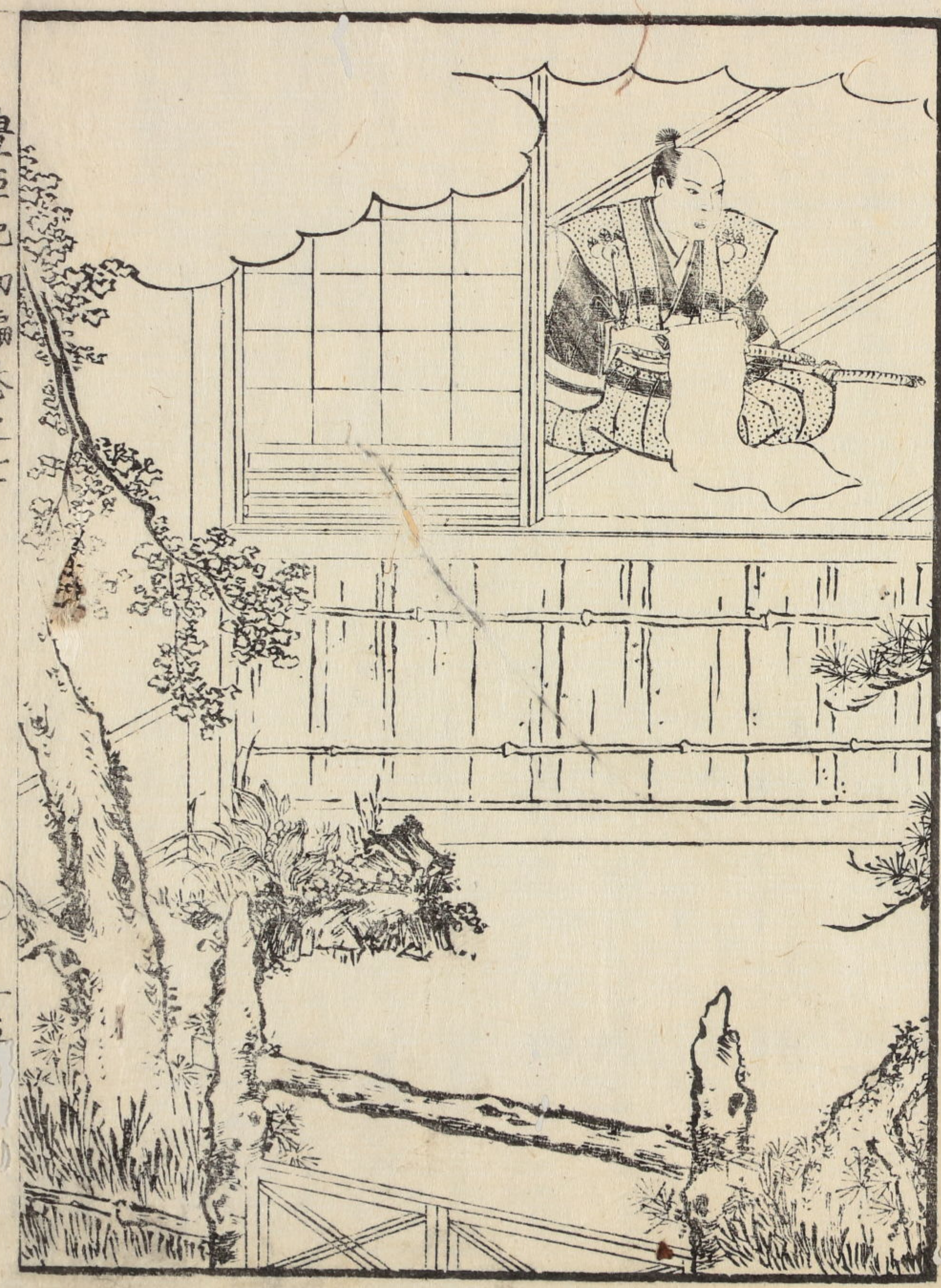
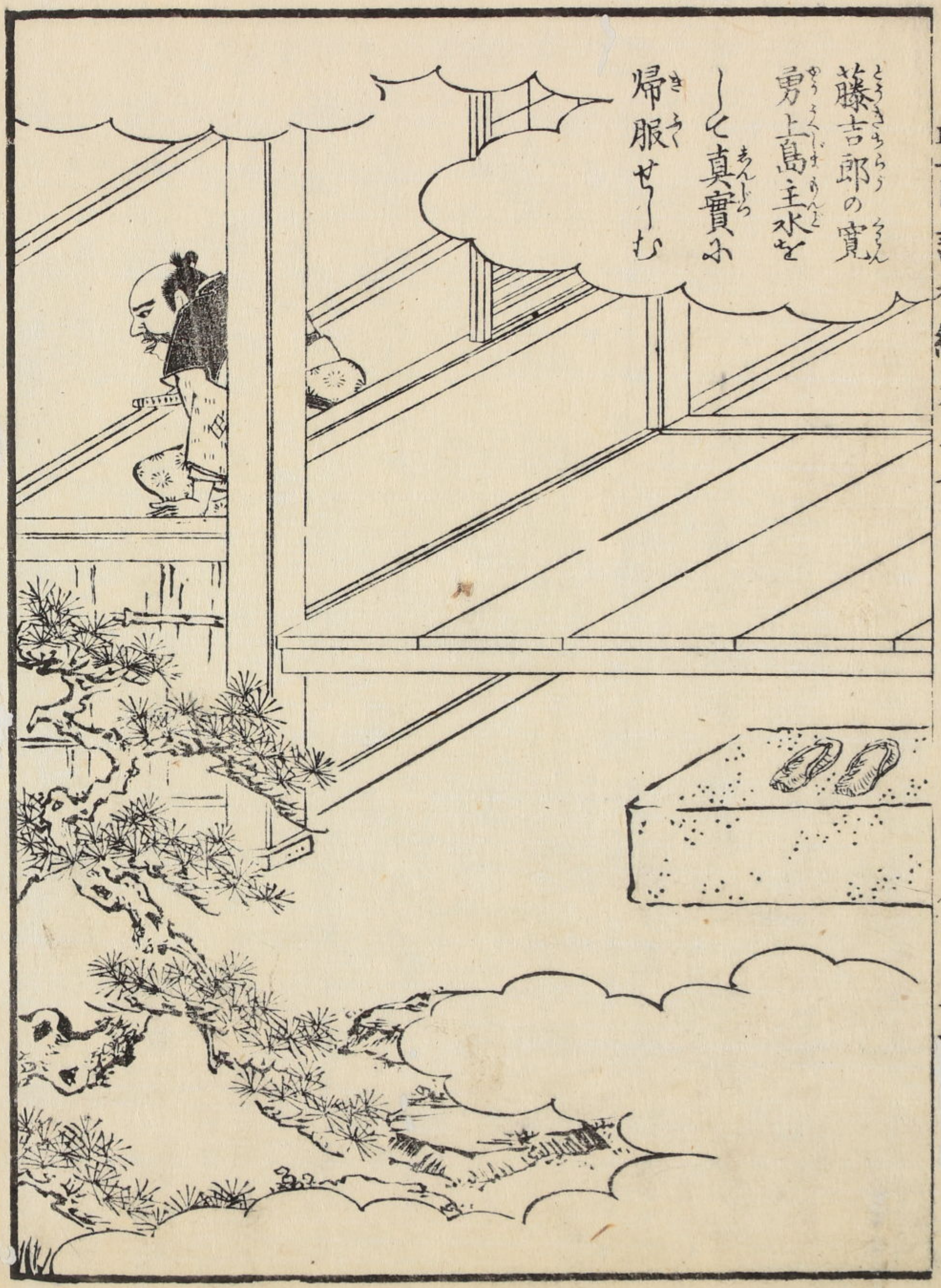
今日御前の勝敗のありしよりざるは、御前もさるるに、おふけ
あふむ。お不届なぐ、快足下が器量とのひ武勇とのひ常
りぬを解知也。あつゝ勇士を徒屈小汚名おふとさるゝ
おせん律の最おしく思ふなり。如何おもるゝと良主おつゝを
忠孝信義を全させ義名を末代お残させんと足下お意遣を
容まんごらぬ。奴おせんなど望もいさう驕慢の心つゝは
祿ぐの足下を順路お帰せしめ逆路を去らせん。咱心中ろろ
寸分も欺誑なれば足下も咱を疑心実事と咱お語られよ
足下が美濃の人おしく齋藤家の反問する律、乃郎徹底お
これとありし。素織田殿お奉公せし隙を窺ひ信長を
刺して齋藤のさめお忠を竭さん心の鏡おけする如し。その

所志忠お似れども誠の忠とつゝは。大抵忠を竭さんお
やが其君の徳不徳順逆賢愚を鑒せし徒お辛困おふ
こと。從來妬懐千万なり。今の藏お小暨おべくは。白地お語り
听おへと問は上島大お駈お死。あや一僞言も吐胸お塞。首を
低く居るゝが。心中深く慮る。藤吉郎がや智藝能泛く
あつぬ不凡の所行およむ。律お快知り。そが上今日槍を合せ。
刃をく朝ふろ辛お响渠が眼光闊きさるりて。さるる日悔お
向ふが如し。これが為お咱目眩る。うち輸ることを不思議なれ。
這俥必定天神の扶助をゆるり。のるる。と思ひ悟る。いと
怖しく。我慢のむおおと消嫉妬の執念烟ときえ。真実心よ
帰伏る。藤吉郎おうち嚮ひ。愕入る御眼力今さるる。ふと

眞言へんやうのー革小内人ころりつるうへ何ぞり躰ーりまを
べー御推查小違ひ多死小臣こと濃列鶴沼大澤次郎九門
重時の弟大澤主水重綱とりかまりの義龍小憑りたれ偽に
清洲小来せ三年已来徒小心を碎きしも世道の義龍天の
照覽小漏れれば斯顯るも理あり。這上へ速小小臣が首を刎
祿を奉るる夕せりつん君と誑く大罪を犯し之と覺斯の
一言木下听くち笑ひ思ひしうざる詞を言ひ我君足下を
誅せんころりば斯まぐ徳慮の命せあらんや足下兄弟原来
齋藤の家人ころりて時節おつれく麾きあふは是罷ことを
ゆさればなり。今義龍へ天誅を道り道りた逆悪人七多り
さめ小竭忠するとも天道いりべりあられむべき。織田小つらへく

三年がうち。徒小辛勞とせられうと思ひことかろるるれ。
明悟の織田殿。快よを足下の素性と查し密小命属られ
する也名。乃夫遠小足下の素性と探し知り。こそ尋常の
大おろし。忽ち誅をかふべれど然らなく却て勇士を愛し。
足下の墨量と惜をむひいりふも実小帰伏させんと柴田佐久
間小指他せられど乃夫小の命せられ。外小知る他さうらま
ぬ。只頼る速小齋藤同腹の念を以。永く織田家小忠を
竭さ。武士の眞加小稱ふと実意濃小解諭され。主水
まなく感服ぬ。信長公の明察高慮実小驚き入るけり
あり。今日中の迷雲傾小晴彌を。是天小日を拜する
らちま。只管ねがふへ良おの下小仕へく眞忠を竭し。天誅を

藤吉郎の寛
勇上島主水を
〜と眞實ふ
帰服せしむ



通せんよるをり他事なくい。此由所披露このとる。願ひあり
 ぬぐう大おぬ。何とて小はが大澤の兄弟なる緯せありぬ。
 と不審なられば後吉郎。寛余と為ん襟底よる。一箇の書せ
 死いご。至水おあめを。関親ま。これ兄次序なら。返書也。
 一見するよる。子母の至水も。惘然として。うら。愕き。這い。あ。天
 自兄へ。務を。一。密書の返。悔ふ。一。其性返。子。七。健見。孫。助
 其。若。兄。が。は。快。お。返。書。の。却。く。過。失。あ。う。ん。と。は。輝。の。と。お。返。せ
 一。が。備。へ。健。見。孫。助。ま。も。至。君。の。間。着。り。つ。る。と。澤。分。より
 熱。き。肝。を。な。じ。お。の。毛。を。堅。く。お。怖。ぬ。一。お。ま。の。海。死。所。林
 策。と。ぬ。ぐ。う。一。お。小。君。が。下。お。ぬ。ど。岐。を。と。挿。と。お。ま。の。こ。る
 づ。き。や。織。小。君。の。恩。澤。の。須。弥。蒼。海。も。比。さ。る。お。足。ら。ぬ。切。り。

方分の一とも。報せんぬお兄とも。招ぎ。お。自。方。小。属。ま。ぬ。を
 英。徳。攻。一。お。小。其。機。會。の。業。内。者。お。の。さ。せ。ん。ぞ。と。言。は。お。木。下
 実。小。然。と。七。願。ひ。さ。り。ぬ。ぐ。親。子。兄。弟。眷。属。ら。り。も。由。改。の
 一。一。一。是。我。國。の。小。お。な。れ。ば。謀。事。を。漏。一。お。ぬ。よ。英。徳。を
 代。こ。と。お。ぬ。ら。る。ま。ど。這。際。の。禪。定。の。權。謀。と。せ。一。ひ。と。り
 ぬ。れ。ば。お。ら。當。的。に。今。川。義。元。上。洛。せ。ん。と。推。進。し。ば。さ。う。ひ。を
 固。く。決。然。ぬ。一。お。ら。一。他。更。お。出。馬。な。れ。ば。その。お。ぬ。お。く
 務。沼。も。固。意。を。通。し。お。ぬ。れ。よ。と。夜。お。入。ん。至。水。を。信。以。織。田。殿
 の。所。へ。出。上。お。ぬ。れ。と。見。系。さ。せ。主。水。が。氏。を。今。日。より。大。澤
 と。革。く。後。お。ぬ。一。つ。る。よ。一。言。快。一。ぬ。れ。ば。信。長。も。斜。ま。ぬ。と
 悦。び。お。ひ。お。自。至。水。お。盃。賜。也。今。と。然。の。君。臣。の。り。と。う。ち

解如人バ大澤主水。落涙ニシテ恩ヲ謝シ。本下と偕小退
 出セリ。信長益本下ガ微智謀ノ有ト感ト。あづり
 恩小翻させ。大澤兄才と自軍小せし。緯大張る功
 と寵愛日小休ム。响小信長亦游入。今川義元と合戦
 ある。評定なさんと偕おを集め。軍議いふと命せり。さ
 柴田佐久間林ホると。叔小のり。和睦をのそめ。言
 せ小上総助。最不興氣。あく在せし。本下及吉郎進
 り。老臣賢の事。評定危きと。安き小属せ。あふこと
 文小その意と。ほむ。且義元へ和使の儀ハ。英濃攻む。さ
 今川小跡。うる。ま。練界。其義。な。ん。バ。何。の。為。小
 和使と。使。也。あ。ふ。さ。し。信。小。今。川。へ。隙。糸。の。と。ハ。ま。り。ん。く。は。る

べり。弱輩の。後。長。即。ガ。老。士。と。関。き。意。権。と。解。る。ハ。悻
 多。く。小。へ。ど。も。軍。議。ハ。君。の。大。事。な。り。所。存。と。置。む。ハ。右。信
 多。う。さ。だ。經。令。許。怒。小。觸。る。ま。も。と。言。状。し。は。る。と。こ。ろ。な。り。
 今。川。義。元。上。洛。せ。ん。と。云。後。遠。三。の。兵。士。と。ひ。き。ひ。征。上。る。の
 可。ふ。其。勢。四。五。万。小。も。追。ふ。べ。れ。ど。軍。ハ。勢。の。あ。ふ。小。よ。う。さ。だ
 只。是。智。略。と。武。勇。と。り。て。勝負。を。決。ま。る。の。の。れ。バ。彼。此。對。揚
 せ。だ。と。り。ん。ど。も。な。ど。の。あ。る。事。あ。ら。ん。や。其。等。の。義。を。あ。が。し
 ぬ。され。決。し。て。隙。糸。し。あ。ふ。べ。う。さ。だ。君。倘。隙。糸。し。あ。ふ。後。義。元
 遂。小。上。洛。ぬ。し。天。下。小。旗。を。揚。る。响。と。云。其。勢。幾。百。万。と。思
 め。さ。然。あ。る。响。あ。る。君。小。も。城。小。後。ひ。あ。ふ。さ。し。又。今。川。も
 校。捨。た。れ。バ。所。緯。お。り。小。織。田。殿。の。和。睦。と。い。う。を。実。と。ま。さ。ん。ま。

針畧ありと云。要人も悟あり。其上陸系の證あり。當座
連枝の公達也。質とるべきべし。和議個をト。好針ふて和議ふ
及も。已後長く渠が指揮ふ。既ひ申さるんば稱ふべし。た
尙義元が上洛なり。万一君の國とらむ。他國も後され申ふ
とも。其响いなむお道なり。然あらん時、年来の君が武
功も花とるをなん。又あらん申の和議終ふ。尙今川が上洛
せざんば。いづなり申ふべき也。義元上洛と所ての濃氣餘を
武門の甲斐なり。他家の卜風も魔くの易く。お返を
緯の最る。然まが勢の多少あり。家運と天のみまうを
おひ。合戦もること終るべし。今川大軍あり。久し武田小糸
加勢せん。軍統義とおぼせられど。よろく寛查し申へし。

今信玄と義元と親きやう小見われども。義元上洛せん
响小。信玄何とて加勢せん。其所細いんと是を推せん。
信玄原より大志あり。持國を弘げ武士を養ひ天下
旗を立んと為られ。いづる義元の下風も多し。や
今川上洛せん。信玄何とて加勢せん。軍の加勢の思ひもあらん。
是が為小義元も。信玄おん心とあり。其故上洛も遅滞
小及び。借又小糸氏康のを来今川と和睦し。縁者と云
あり。これども。其が國東八箇國を領す。二十余万騎の大お
られ。など今川の後継し。上洛の勢を助くべき。我君も張
一國の領主と見し。せ申さる。大張四海を一統せん。わ。こ
思召し。せ申さる。の。武田今川小糸のわ。牛角の領國

あり。いりきも天中の望とあると。何とて今川小加勢を
つた。然るに小加勢武田の陣へ所被勞あてりしを。今川領の
軍兵凡六万もあるべきと。當國の所軍勢小。是を比されば
款しごと。お月しおをの理られど。小軍をりて大軍小勝ハ
之の指揮およれり。又義元の軍賦也。小居久しく被
おありて。大暨奈効い。義元徳小勇気を著ら。武士
桃んと。謀士を用也。針畧純く。急疾られ。集る軍の腕
ことい集蚊群蟻小異る。何百万騎進るとも。謀りて
教さん小。拈茶と菊よを易う。一。倘今義元威小矯く。
尾張の所領へ丸入るさ。首を包君小款とる。是今川の
領國を天の賜る响至き。我君とれと取とんへ却て天意小

送ふべし。這遭義元を伐捕む。君の威風いあつ。つとく
鄰國武士いりもさ。遠と近と智者勇士君と慕え
来らん。陣万の海小帰る。如し。然し之后小英法を江
伊勢など。次鎮め。速小上洛ま。王化を佐相と政
事と正し。朝威を四方小あめ。玉也。四海のびる皆く
おる。秀逸所教軍小。何とて遠く陣系し。おひ。辱せ
あふ。所謂の掌てなるべし。一。約結し。言状せ。信長
あきり小。鏡ませ。おひ。雀躍する。心喜悦あると。佐久間
林倚。廻りて。回。後吉郎の言を所。一理ある。お似。と。ども
義元。累代の名家小。一。智勇の武士も。一。鞍。小。小
武田の。お家。よ。加勢。せ。ま。と。ふ。り。も。一。陣。是。亦。世。方。の。推。量

城を山口にたす助へ糸尾織田家の縁を食ひ飽す臥の安
 穩なるもとむ是尾の懸海ありしと。自己が失よを寵養
 それを恨んむを君小引送む。終ふその方と滅亡こと
 天目地耳の叔へ玉を取あがり。遠小過し日山口にたす助が邪
 小死しし。戸部新左衛門が嫡子新十郎の父が仇なるたす助
 と深く恨み身を山林小隠し。山口父子を密小隠ひ弔せり
 渠とらぬ。父の誓懐を消せんものと。又とるそとりのも一
 小く謀ごとく。ひとまが掛川。掛川の別は糸尾。小越きん。朝比奈を
 慮んと思起り。終る小別比奈。彼中より戸部新左衛門存生の
 時、深く水裏の交りせり。賸彼中より女せり。新左衛門
 書とし。これに新十郎の孫小當り。遠寄の縁あるをり

彼中より使せぬる小佐と悟る戸部が方のうへ。郵程あり
 並く。と。後名の菅野小藤居。木下友吉。頼人より。
 遠事と所出。涉理。孫を清小一針を傳合。遠民。漢及
 選し。孫を清へ書。若く肉言とらけ。賣紙者小おとあ
 新十郎が密小ゆた。紙を糊高。往後と小烟。孫の火。など
 乞ふつけ。遂小新十郎と親くなり。自の濃。孫の若るる。必紙
 をめ。遠。孫の。葛布。など小交易せん。と。遠くを境。と。擇ぐ
 こと。自の。世。孫。新十郎。も。の。来。小。實。小。生。と
 思ひ。る。め。意。由。か。く。何。を。書。せ。基。子。の。英。漢。の。生。る。ふ。
 通。路。の。り。由。名。勢。あ。る。尾。張。の。大。抵。知。お。た。ん。と。お。い。ま。し。く
 津。世。孫。の。小。英。漢。と。尾。張。の。年。久。く。弓。響。合。く。在。り



豊臣記 初編 卷之十一

七



浅野のやぶり
 紙商人と化て
 濱名小到り
 戸部新十郎
 偽戦を
 語る

豊臣記 初編 卷之十一

七

一が。を来和睡ありてより。百姓もあれあ人まれ。最後
 往來せり。遠達も徳例を陪あふ。織田の徳家中種くるる。
 側度おむと有るよと。若くも戸部も何お根を撥。さうい
 織田家の徳士の中。山口なる助といふ者。甚子に知くわく
 り。あや。と同たれ。社とと。越を深ふ。且疎く。死信風あ
 新十席。お若くい。や。願。口。及。小。最。傍。一。死。り
 こそあれ。彼。河。郎。の。鳴。海。あ。く。徳。例。殿。小。對。一。六。大。忠。臣。と
 所。つ。る。が。い。う。る。故。あ。や。後。来。へ。信。長。公。の。河。軍。勢。鳴。海。の。城。へ
 推。進。く。合。戦。さ。る。る。屢。り。徳。例。あ。く。も。鳴。海。あ。く。も。そ。風
 後。と。承。所。へ。山。口。及。弟。よ。を。織。田。家。の。大。功。の。右。臣。なる。か。何。を
 徳。例。の。河。城。より。軍。と。向。を。後。ふ。や。う。ん。と。若。く。不。審。と。立

く。以。取。日。や。今。日。は。ま。ご。定。め。て。軍。の。最。中。る。る。べ。し。と。言。滑。小
 傳。と。所。新。十。席。の。養。を。播。足。深。き。恨。之。の。山。口。父。子。他。方。に
 け。て。う。せ。ん。より。亡。父。の。願。買。小。新。十。席。が。憤。怒。の。又。あ。て。ん
 の。と。髮。冠。を。擲。を。り。勃。然。と。一。く。牙。齧。鳴。一。怒。か。り。て。小
 歌。と。涉。世。強。ま。柔。の。成。終。り。と。猶。お。森。び。囁。く。小。呂。れ。を
 頼。く。禱。去。り。新。十。席。今。の。あ。や。些。も。踰。躋。べ。き。小。あ。く。と。と
 去。氏。の。お。小。分。を。窺。一。他。知。れ。た。こと。漢。名。を。立。出。白。頭。契
 漢。と。正。一。の。地。小。三。別。跡。は。後。里。一。路。に。既。夕。日。も。金。く。く。是。ね。
 廿。日。小。部。の。空。る。れ。ば。甲。辰。の。際。の。響。り。う。ら。二。川。の。縁。を
 過。る。小。及。び。く。月。光。の。助。を。好。し。う。ば。辰。の。若。小。只。魯。魯。と
 歩。走。は。る。る。あ。ど。小。辰。の。曉。る。こ。ろ。是。時。う。る。矢。矧。の。橋。小。島

豊前新編

十一

戸部新十郎
山口と殿人と
身と窠と
鳴海と趣と



豊臣記 卷之七

七回

豊臣記 卷之七

九三





木下
偽戦

あつて
戸部
新十郎
狐疑せし
むる圖

あり。燒るも何れ。鳴浦勢へ射懸し矢を捨ふて召れ。旗を
これぞ召るより加勢する。大寺宮貴の軍兵も。忽地こつり
疑ひ起り。この謀畧も隊士やせん。と矯り不降。清洲勢も
先逃く。と推進し。お放たる。矢を召る。さあ。ぬ。不智多の加
勢も。多く。執疑し。男も。是を織田と山口と内急せし
計畧も。我儕も。軍兵も。能く。出。欺き。敵。こ。と。は。る。る。る。る。る。
虚くとし。我。ひ。つ。つ。忽。虎。坑。の。害。ら。ん。願。退。去。と。の。ま。ま。
小。一。戦。し。て。退。り。り。今。の。鳴。浦。の。一。隊。な。れ。ば。恒。志。と。名。畧。
ん。徳。勢。と。薬。め。退。く。と。進。兵。の。これ。と。攻。も。中。と。む。知。く。ぬ。
る。し。て。退。せ。り。形。の。機。會。も。戸。部。新。十。市。這。場。畔。と。御。
廻。し。て。軍。の。始。終。を。見。ゆ。る。織。田。山。口。の。敵。合。て。智。多。郡。

中の武士遣も多く伐せし。あるまじく決定お懸る。ゆめれば。
是を義元お海松に。万屋山口父子をうりて父の憤怒を松
右人と。於此三日遠地お召る。よしく。指。他。を。決。し。遠。召。當。て。
ひき返さ。涉。野。延。多。清。へ。預。て。より。戸。部。新。十。市。が。陰。力。あり。
情。お。こ。り。何。ひ。し。が。今。新。十。市。が。返。さ。を。見。て。既。謀。成。結。し。
り。と。智。多。木。中。が。陣。お。り。始。終。の。こ。ろ。告。り。し。六。人。の。
られ。お。せ。と。徳。軍。お。指。揮。な。し。鳴。浦。の。陣。を。ひ。き。返。さ。し。ひ。清。
洲。へ。こ。の。退。陣。せ。り。智。多。の。郡。の。武。士。遣。り。ぬ。ん。山。口。父。子。の。
お。ま。と。疑。ひ。な。り。し。ま。る。ぬ。又。遠。遭。の。合。戦。も。能。欺。き。こ。る。を。
大。お。怒。り。郡。中。の。備。士。御。出。せ。し。一。お。後。府。へ。られ。と。御。伸。し。り。
是。木。中。が。密。付。し。て。山。口。父。子。が。懸。逆。を。矢。お。入。り。て。得。る。

初る歎きをいふ。と老波如公家むれば。新十希流うら。摺
今こと父の仇を伐家と記すべき時ぬれり。然ども。咱等。鉄籍の
多るれば。これを自若く併て。仇を伐べき道とほむ。公程いくハ
祖父の慈悲りて。若く併て。併の併解儀と。そのまぢやとかかりハ
さし。本謂を併小終りりふ。さ。開も。鳴海なる山口父子と。
今川を二の右に。敵の織田家の後をう。遠道鳴海の
軍と併。响こそ置られ。乱軍小終。抜て。山口を。敵は人のと。彼
小到り。蹠蹠をるれば。初級と。如條く。つらと。欠も。なく。始
終を。おぼやと。併中。大。小。驚き。初る。大。の。起るといふも。戸
初の家。運の。尽さる。お。それ。か。思。符。若。れば。先。日。新。元。米。の。替
生。一。時。遠。洲。方。と。謂。え。つ。る。戸。初。を。お。お。る。山。口。が。姑。子。九。希

次第を安んじ。織田家小止めて。持並しも。おぼや。死。一。ま。で。そ
の。ち。九。希。次。希。遠。洲。と。逃。出。鳴。海。へ。あ。ら。び。還。り。ぬ。れ。ど。も。それ。え
織田より。伐兵も。向。ま。ま。これ。不。審。き。ふ。ら。なり。其。小。合。せ。て
見る。响。の。遠。道。鳴。海。の。合。戦。ぶ。う。山口。織。田。小。一。致。一。ん。智。多。の。初。の
武士。遠。と。敵。捕。る。小。お。遠。な。り。か。り。へ。懸。き。及。滅。る。乃。氣。並
惟。小。這。り。と。敵。府。へ。注。伸。な。り。る。う。山口。父。子。と。某。子。小。警。せん。
び。ひ。延。引。と。ま。く。う。だ。先。に。速。小。と。準。儀。一。の。併。中。の。理。馬。あ。く。
敵。府。の。誠。へ。出。仕。な。り。多。り。初。る。お。尾。花。なる。智。多。初。中。の。併。家
若く。併。虫。を。ひと。の。お。り。と。織。田。山。口。が。惟。一。の。軍。小。併。士。懸。一。く
戦。死。せ。し。は。併。小。それ。を。注。伸。せ。り。初。さ。な。く。て。織。田。の。朝。比。宗
併。中。の。出。仕。し。て。新。十。希。が。目。若。小。見。つ。し。つ。る。ゆ。の。次。方。合。符。の

朝比奈恭次
主君を諫め
戸部の家と興
山口父子と
廢せん



是小教明なり。形計の事ありなむ。知らず道ふし悔しきよ。然らば山口父子が條得戸部が蹟礎の免扱某方宜き小了管られよ。命令をばて朝比奈のまの形十糸を執違の戸部の取名とお徳させ。然して山口條伐の保いふと供士を集められを伴定はらる小。鳴海へ推進せ伐人の。と皆一戸小勇とるを朝比奈をを制して云やう。山口父子を伐んる。易き小似れど大のあり。渠備清洲と合作なり。軍とるさ。容易くるま。が。自云の兵士をも換えんことあるん。如き智略をりて静む。ゆゑとも易くゆらちん。欽。今乃翁が男ふ。不。尚。唇形より使者を遣られ。山口父子を唱寄せん。ふ其使。況ふ。今川。殿。遠。遭。上。洛。の。條。小。属。て。別。く。君。より。所。程。あり。ふ。速。出。仕。ある。と。僧。送。る。の。

あり。山口父子小教のこのことお思ひ。清洲へ沿伸の種おせん。と。況。び。あ。い。々。系。府。せん。其。と。れ。殿。中。小。勇。士。を。依。重。生。扱。く。條。戮。せ。ば。一。矢。一。石。殺。費。せ。ば。滅。さん。こと。易。く。ん。と。言。を。よ。供。士。も。この。義。小。付。し。ま。り。形。十。糸。を。招。き。出。し。く。左。馬。助。を。捨。お。せ。よ。し。これ。を。命。ぜ。ら。れ。な。れ。ば。鉄。法。こ。と。を。き。り。ぬ。し。形。十。糸。の。使。士。も。平。松。次。弟。三。郎。山。内。及。三。弟。遠。友。人。と。つ。う。い。く。山口父子を招くれ。鳴海の城。山口左馬助。使。使。の。説。を。承。所。疑。ひ。も。せ。を。使。者。を。返。し。出。仕。の。準。依。ぬ。ら。る。と。好。子。九。弟。次。弟。父。小。向。ひ。今。後。府。より。招。く。と。も。外。面。の。清。洲。へ。従。ふ。方。な。れ。ば。一。意。織。田。へ。つ。げ。て。後。系。向。あり。と。然。る。べ。し。と。言。せ。し。り。ど。も。左。馬。助。の。後。よ。りの。始終。とい。ひ。織。田。小。向。の。

豊臣評話

かろく 様會由名 彼此の氣配もなご。父子一階お馳度とや
久 駿府へ行くことを謀られ

繪本豊臣勲功記初編卷之

